日本語における「繰り返し」の下位区分の検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Oe, Motoki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00054290

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇
第 11 号　2019 年　67～78

日本語における「繰り返し」の下位区分の検討

大 江　元 貴

1.　はじめに

本稿は，日本語において言語要素を 2 回以上繰り返す言語現象現について考察を行う。言語要素の「繰り返し」(iteration)は，その意味や形式的な特徴の違いから「重複」(reduplication)と「反復」(repetition)の 2 つに区分できることが Gil (2005)において示されている。本稿は，この Gil (2005)の 2 つの区分を踏襲しながら，日本語の繰り返しが見せる形態・統語的なふるまいを観察すると，重複と反復にはさらにそれぞれ 2 つの下位区分が認められるということを示す。

2.　日本語における「繰り返し」の下位区分の検討

まず 2.1 節で言語要素の繰り返しに関してよく知られている「重複」と「反復」の違いについて見る。それを踏まえて，2.2 節では先行研究の知見を整理しながら，重複には「語レベルの重複」と「句レベルの重複」があることを示す。続く 2.3 節で反復も「文レベルの反復」と「談話レベルの反復」の 2 つに区分しておくことが繰り返しの記述にとって有用であることを述べる。

2.1　「重複」と「反復」の区別

言語要素の繰り返しは，一般的に重複と反復の 2 つに区分される。日本語の例を挙げると，(1)が重複，(2)が反復に該当する。

(1) a.　人々／山々／時々／所々
　　b.　寒々／近々／高々／あつあつ
　　c.　返す返す／泣く泣く／惚れ惚れ／生き生き
　　d.　ピカピカ／サラサラ／ベトベト／ドキドキ

(2) a.　［友人が運転する車の助手席に座っていると進行方向の先に何かあるのに気づく。よく見ると人間が横たわっているとわかり驚いて］わっ，人人！
　　b.　［冷たい風が吹いて］ううう，寒い寒い。
　　c.　「［早く返してよ」と相手に急かされて］わかったよ。返す返す。

(1)の重複は語の内部現象であり，重複によって形成される語を重複語（あるいは畳語）と

いう。(1a-c)は名詞，形容詞（の語幹），動詞（の終止形，連用形）が語基となりこれらが繰り返されることで新たな語を形成している。(1d)は，繰り返される言語要素（「ピカ」「サラ」「ベト」「ドキ」）が独立して語として用いられることはないが，これらが繰り返されることでいわゆるオノマトペとしての語を形成している。これに対し(2)の反復は語の境界を超えた繰り返しである。

重複は語の内部で生じる形態論的現象であり，反復は語を超えて生じる統語・談話現象であるというのが定義的な違いであるが（Gil 2005，長屋 2015），Gil (2005)では，この区別を反映した意味と形式に関わる複数のふるまいの違いが提示されている。本稿ではその違いが比較的見えやすい形式的特徴に限定して議論を行う。Gil (2005)で重複と反復を区別する形式的特徴として示されているのは，「繰り返される要素の数」「イントネーション句」「繰り返される要素の隣接性」であるが，日本語の繰り返し現象を考察する上では「連濁」と「アクセント句」も重要になる。本稿ではイントネーション句と繰り返される要素の隣接性は特に反復の下位区分を検討する際に重要になると考えているので，この 2 つについては反復の下位区分を検討する 2.3 節で詳しく触れることにし，ここでは連濁，アクセント句，繰り返される要素の数について見ておく。

重複は，(a)連濁が生じる，(b)繰り返される要素が本来持つアクセント構造が変化し重複語全体で 1 つのアクセント句(アクセントの核を最大 1 つ持つ韻律的なまとまり)をなす，(c)3 回以上の繰り返しはできない，という特徴がある。(a)連濁については，「ひとびと」「さむざむ」「かえすがえす」「ほれぼれ」などの例が該当する。(b)アクセントについては，例えば「ひと（低高)」→「ひとびと（低高低低)」では 2 つ目の「ひと（びと)」が，「かえす（高低低)」→「かえすがえす（低高高高低低)」では 1 つ目の「かえす」が，本来のアクセント構造から変化し，重複語全体で 1 つのアクセント句を作っている。連濁やアクセント構造の変化は一般に合成語に観察される現象であり，繰り返しが生じている部分全体で 1 つの語としてのまとまりをなしていることを示している。また，(c)繰り返される要素の数についてであるが，重複語は一般的に事物，行為の複数性や程度の強調を表すと言われているが，いくらその数の多さや程度の強調を表す意図があっても，(3)のように 3 回以上の繰り返しは容認されない[1]。これも，2 回の繰り返しが「語形」として認められているためである。

(3) a.??山山山山山に囲まれた集落。
b.??その映画は近近近近公開される。
c.??彼が活躍する姿に惚れ惚れ惚れする。

これに対して(2)の反復では，(a')連濁が生じたり，(b')アクセント構造の変化を生じ 1 つのアクセント句を作ったりするような現象は観察されない。(2)は「ひとひと」「さむいさむい」「かえすかえす」と発話され，「ひとびと」「さむいざむい」「かえすがえす」とは発話されない。アクセントも，通常は「ひとひと（低高低高)」「さむいさむい（低高低低高

低)」「かえすかえす（高低低高低低)」となり，繰り返しが生じている部分全体でまとまった 1 つのアクセント句を作らず，2 つ以上のアクセント句からなる発話になる。繰り返される「人」「寒い」「返す」のそれぞれが独立した語としての性質を保持しており，反復は語の境界を超えた繰り返しであるといえる。また，定まった「語形」を持つわけではないため，(4)のように，(c')3 回以上の繰り返しも自然に成立する。

(4) a. ［友人が運転する車の助手席に座っていると進行方向の先に何かあるのに気づく。よく見ると人間が横たわっているのだとわかり驚いて］わっ，人人人人人！

b. ［冷たい風が吹いて］ううう，寒い寒い寒い寒い。

c. 「「早く返してよ」と相手に急かされて」わかったよ。返す返す返す。

以上の日本語の重複と反復の違いをまとめたのが以下の表 1 である。

表 1　重複と反復

		連濁	アクセント句	要素の数	例
繰り返し	重複	生じる	1	2	(1)
	反復	生じない	2 以上	2 以上	(2)

表 1 の重複と反復の基本的な違いを踏まえた上で，以下ではさらに重複と反復の下位区分についてそれぞれ検討する。

2.2　重複の下位区分：「語レベルの重複」と「句レベルの重複」

(1)のような典型的な重複語とは異なるタイプの重複があることを指摘している研究に小野（2015）がある。小野（2015）は，名詞の重複が「する」を伴った(5)のような例を挙げ，これを「構文的重複語」(constructional reduplication)と呼んでいる。

(5) a. できて，いきなり子供子供する女。多いよね。ソレにまどわされとる男も，また，多し。

b. このスープ，野菜野菜してるね。　（小野 2015:463）

(5)のような表現は連濁が生じない点（(6)），一般の重複語が成立しない重複が可能であり生産性が高い点（(7)(8)）などにおいて典型的な重複語とは異なることが指摘されている。

(6) a. 島島（しましま）している島

b. 木木（きーきー）した家が好きな人　（小野 2015:469）

(7) a. *犬犬

b. *猫猫　（小野 2015:466）

(8) a. 犬犬した犬

b. 猫猫した動き　（小野 2015:466）

また，(5)と同じような位置づけが可能なものに，青木（2009）が「動詞重複構文」，野

呂（2016）が「動詞連用形重複構文」と呼ぶ(9)のような表現がある[2]。

(9) a. 流れる汗を拭き拭き，一休みした。（野呂 2016:133）

b. 貞子は，あわてそそくさと降りて，三浦君のほうを振り返り振り返り，それでも姉の後に附いて行った（青木 2009:5）

(9)のような表現も，連濁は生じず（「拭き拭き」は「ふきぶき」とはならず，「振り返り振り返り」も「ふりかえりぶりかえり」とはならない），一般の重複語が成立しない動詞の重複が可能な生産性の高い表現である。

(5)(9)は，典型的な重複語ほど語としての緊密性が高くなく，一定の意味的・形態的制限の範囲内で生産的に新しい表現も作りうる。繰り返される要素が「語」より大きい単位であることもあり，(10)は名詞句や節が，(11)は「V テハ V」という動詞句が繰り返されている。

(10) a. あの人の演技は，関西の劇団出身関西の劇団出身している。

b. 俺に任せろ俺に任せろした態度を取られて腹が立った。（小野 2015:468）

(11) 白雲が湧いては消え湧いては消え飽きない自然の模様を描く（青木 2009:10）

小野（2015:469）が(5)について「反復と重複の中間的なものである可能性」について述べ，青木（2009:11）が(9)について「単なる「語」のレベルでなく，「句」のレベルを含む構文として分析する必要」性を強調しているとおり，これらは語よりも大きい「句」を形成する際に生じる繰り返しとして位置づけられると考えられる。本稿では，このような句形成のレベルで生じる繰り返しを「句レベルの重複」と呼び，これに対し(1)のような典型的な重複語を作る繰り返しを「語レベルの重複」と呼ぶことにする。

句レベルの重複は，上述の連濁や生産性のほか，アクセントと繰り返される要素の数についても語レベルの重複とは異なったふるまいを見せる。アクセントについては，アクセント構造の変化が生じ 1 つのアクセント句をつくるパタンと，繰り返される要素がそれぞれ元のアクセントを保持し 2 つのアクセント句をつくるパタンの両方がありうる（cf. 定延 2015）。

(12) a. こどもこども（「低高高高低低／低高高低高高」）している

b. 流れる汗をふきふき（「高低低低／高低高低」），一休みした。

つまり，語レベルの重複では義務的に生じていたアクセント構造の変化が，句レベルの重複では任意に生じる現象になっており，アクセント句は必ずしも 1 つではない。

また，繰り返される要素の数についても，定延（2015）に興味深い指摘がある。定延（2015）は，(13)のような例を挙げ，2 回の繰り返しを 1 単位とした偶数個の繰り返しならば 2 回を超えた繰り返しが可能であることを指摘している。

(13) そのため，1 月一杯の日記は，金金金金した内容になりますので，このブログを定期的に見ている方がいましたら，ひと月休んで，2 月から来られた方が良いと思います。（定延 2015:357）

(13)のような，「金」が計 4 回現れる繰り返しは自然であるが，「金金金した内容」のような奇数回の繰り返しになると，あまり自然でなくなるだろう。動詞連用形の重複についても，事情は同様であると考えられ，(14)のような偶数回の繰り返しは実例にも観察されるが，(14)を「汗を拭き拭き拭きしていたら」と 3 回の繰り返しにすると自然さは低下する[3]。

(14) 暑い中勇気を振り絞って？最寄駅まで徒歩 7〜8 分，ようやく駅に着いて汗を拭き拭き拭き拭きしていたら，ナナナント致命的な忘れ物をしたことに気づきました。。（http://njunko358.com/article/460634352.html）

語レベルの重複では，3 回以上の繰り返しは全く認められなかったのに対し，句レベルの重複は 2 回の重複を 1 単位とした偶数個の繰り返しならば 2 回を超えた繰り返しが可能なケースが出てくるのである[4]。

以上，主に先行研究の記述を踏まえながら見てきた語レベルの重複と句レベルの重複の違いをまとめたのが表 2 である。

表 2　重複の 2 つのタイプ

		連濁	アクセント句	要素の数	生産性	例
重複	語レベルの重複	生じる	1	2	低い	(1)
	句レベルの重複	生じない	1 以上	2 か 2 の倍数	高い	(5)(9)

句レベルの重複は，語レベルの重複ほど繰り返し部分が緊密性を持たないものの，1 つのアクセント句を作ることも可能で，繰り返される要素の数も無制限ではないことから，句レベルでスロットを含む抽象的な「構文形」は有していると考えられる。Gil (2005)などの従来の研究では重複が生じるレベルとしては「語」が想定されていたが，小野（2015），青木（2009）や定延（2015）の研究は「句」のレベルで生じる重複がありうるということを示している。本稿も同様の見方を採り，重複に語レベルの重複と句レベルの重複の 2 つの下位区分を認める。

2.3　反復の下位区分：「文レベルの反復」と「談話レベルの反復」

この節では，反復の下位区分について検討する。本稿が反復の下位区分の 1 つとして抽出できると考えるものに，「文を形成する過程において一息に立て続けに同一の言語要素を繰り返す」という反復がある。例えば，(15)は，「人」の存在承認，「寒い」という感覚の表出，「返す」という行為を実行する意志の表出といった発話行為を行う文を形成する過程で一息に立て続けに「人」「寒い」「返す」という言語要素を繰り返している。

(15) a.　［友人が運転する車の助手席に座っていると進行方向の先に何かあるのに気づく。よく見ると人間が横たわっているのだとわかり驚いて］わっ，人人！

b.　［冷たい風が吹いて］ううう，寒い寒い。

c.　「［早く返してよ」と相手に急かされて］わかったよ。返す返す。

（(2)の再掲）

(15)は，文形成というプロセスがあってはじめて生じる繰り返しであり，本稿ではこのタイプの反復を「文レベルの反復」と呼ぶことにする[56]。文レベルの反復には，連濁やアクセント構造の変化は生じず，3 回以上の繰り返しも可能であるということは 2.1 節で確認したが，ここで加えてイントネーション句，繰り返し要素の隣接性について見ておく。

イントネーション句は，アクセント句がいくつか集まってできる韻律的なまとまりである。1 つのイントネーション句の中ではダウンステップ（2 つ目以降のアクセント句においてアクセントの高低のピッチレンジが次第に縮小する現象）が観察され，イントネーション句の境界にはポーズやピッチのリセットが生じる。節の境界がイントネーション句の境界に相当することが多い。また，繰り返される要素の隣接性とは，文字通り繰り返される要素の間に他の言語要素が含まれていないことを指す。先に述べた「文を形成する過程において一息に立て続けに同一の言語要素を繰り返す」という説明の「一息に」がイントネーション句の特徴を，「立て続けに」が要素の隣接性の特徴について述べたものであり，(15)はいずれも，1 つ目の要素と 2 つ目の要素の間にポーズなどをおかずに 1 つのイントネーション句で発話される文を想定して示している。

これに対し，(15)を典型とする文レベルの反復からは外れる別のタイプの反復が(16)のようなものである（(16)の括弧内の数字は間隙の秒数であり，ここでは 0.4 秒のポーズがあったことを示している）。

(16) 01A：だから黄色い(0.4)黄色い丸がとかゆって，それにびっくりしたの？
02B：びっくりした。　（竹田 2017:70 の例文を簡略化）

(16)に現れている「黄色い」と「びっくりした」の 2 つの繰り返しは，2.1 節で確認した反復の特徴は有しており，その点は文レベルの反復と共有している。すなわち，連濁やアクセント構造の変化を伴って 1 つのアクセント句を作るような語の緊密性を示す現象は観察されず，3 回以上の繰り返しも問題なく成立する（例えば，2 つ目の「黄色い」の後に再び 0.4 秒の間隙を挟んでさらにもう 1 度「黄色い」と発話することは可能である）。(15)が(16)と異なるのは，イントネーション句と繰り返される要素の隣接性においてである。「びっくりした」の繰り返しは，異なる 2 人の話者によって実現しており，明らかに 2 つの「びっくりした」はそれぞれ異なるイントネーション句にあり，また隣接もしていない。それよりやや微妙なのが「黄色い」の繰り返しであるが，繰り返しの間にポーズが含まれており，1 つ目の「黄色い」と 2 つ目の「黄色い」は異なるイントネーション句にあると考えられる。またポーズも言語的要素の 1 つと考えると，隣接性も満たさないことになる。本稿では「びっくりした」の反復だけでなく，「黄色い」の反復も文レベルの反復とはみなさない。それは，ポーズが挿入されることで何らかの発話計画の変更が生じている可能性があり，ポーズの前後で異なる文形成を行なっていることが排除できないためである。例えば，1 つ目の「黄色い」を発話しはじめた時点では「黄色いんだよ。」で文を終わらせようとして

いたが，0.4 秒の間隙の間に連体修飾の形にして文を続けるように発話計画を変更したという場合，少なくとも(15)のように繰り返し全体が 1 つの文形成のプロセスにあるとみなせるものとは同一視できない。このような，(16)のようなタイプの反復を「文レベルの反復」と区別して，仮に「談話レベルの反復」と呼ぶことにする。

(16)のような談話レベルの反復までを含んで広く反復を観察した研究は，談話分析的研究にいくつか見られ，日本語を扱ったものでは，中田(1992)，竹田(2017)などがある。これらの研究で扱われている反復の中には，(17)のように語形が一部異なるケースも含まれる[7]。

(17) 01A：そこまでの徹底ぶりというか，もちろん誰にも迷惑をかけてませんし，しかもそのラインは余裕をとって(0.6)あの引いてあるラインなので，
02B：うん
03A：多少出てもどなたにも迷惑かけない仮に他にびっしり詰まっていても(0.8)迷惑はかからないのに(1.0)ということで，（竹田 2017:73 の例文を簡略化）

(17)のようなものまで反復に含めるとすると，書き言葉でも(18)のようなものがあり，文章論や修辞論に接近する。

(18) a. それは余りに明か過ぎる事だと思った。それは早晩如何な人にもハッキリしないでは居ない事がらだ。何しろ明か過ぎる事だ，と思った。
（相原 1985:165）

b. 懸物が見える。行燈が見える。畳が見える。和尚の薬罐頭がありありと見える。
（小池 2002:319）

以上のように重複に比べて反復と呼びうる現象の範囲は広範であるが，そのような中で「文レベルの反復」という類型を抽出しておくことの意味について触れておきたい。文レベルの反復を談話レベルの反復と区別するのは，それが反復という現象の記述の精緻化にとって重要だと考えるからである。イントネーション句や繰り返される要素の隣接性以上に，反復の記述にとって重要になる両者の違いは「生産性」にある。生産性(productivity)は通常，語形成において形態素が組みあわせることのできる要素の多様性のことを指す概念であり，文以上のレベルにおいて用いられることはないが，ここでは便宜的に「繰り返しの成立のしやすさ」という意味で，括弧付きで「生産性」と呼ぶことにする。文レベルの反復は，自立語であれば原理的にはどのような品詞でも繰り返しが可能であり，語レベルの重複，句レベルの重複に比べると生産性が高いといえる。ただし，いかなる場合にも文レベルの反復が可能なわけではなく，一定の形態的・統語的な制約がかかる。形態的な制約を見ると，(19)のような自立語ではない要素のみの反復は不可能である。また，(20)のように反復される要素のモーラ数が非常に多い場合もあまり自然ではない（通常 2 つの発話として解釈される）。

(19)??太郎は来るかもしれないかもしれない。

(20) ？［「窓ガラスを割ったのは誰？」と聞かれて］窓を割ったのは太郎だよ窓を割っ

たのは太郎だよ。

cf. ［「窓ガラスを割ったのは誰？」と聞かれて］太郎太郎！

また，統語的な制約もあり，(21)のように終助詞や程度副詞など，他の言語要素との共起制限が強いという特徴がある。

(21) a.??［風に吹かれて］寒い寒いなあ。

cf. ［風に吹かれて］寒いなあ。

b.??［風に吹かれて］すっごい寒い寒い。

cf. ［風に吹かれて］すっごい寒い！

重要なのは以上のような制約の存在は，文レベルの反復という類型を抽出したことによって記述できるものだということである。(22)(23)のように異なる話者による反復，文をまたいでの反復，繰り返される要素の間にポーズがある反復といった，本稿が談話レベルの反復と呼ぶものについては上記のような制約は生じない。

(22) a. A：太郎も来るかもしれないの？

B：うん，かもしれないよ。

b. 窓を割ったのは太郎だよ。信じて。本当に窓を割ったのは太郎だって。

(23) a. ［風に吹かれて］寒い(1.0)寒いなあ。

b. ［風に吹かれて］すっごい寒い(1.0)寒い。

つまり，文レベルの反復には形態的・統語的な制約の中で自然になったり不自然になったりするという文法性が見て取れるが，談話レベルの反復は談話的条件さえ整えば，形態的・統語的には制約はかからず，「生産性」という面では無制限であるといえる。このような異質性を捉えるためにも，表 3 に示されるように文レベルの反復と談話レベルの反復を区別しておくことが有用であると考える。

表 3　反復の 2 つのタイプ

		連濁	アクセント句	要素の数	イントネーション句	要素の隣接性	「生産性」	例
反復	文レベルの反復	生じない	2 以上	2 以上	1	する	高い	(15)
	談話レベルの反復	生じない	2 以上	2 以上	1 以上	しない	無制限	(16) (17)(18)

3　「繰り返し」の 4 区分と「繰り返し」をめぐる課題

2.2 節では，先行研究の記述を参照しながら，重複には語レベルの重複だけでなく句レベルの重複があることを見た。さらに，2.3 節では反復が文レベルの反復と談話レベルの反復の 2 つに下位区分できることを見た。これらは，それぞれ語形成，句形成，文形成，

談話形成という異なるレベルのプロセスで生じる繰り返しであり，この違いが「連濁」「アクセント句」「繰り返される要素の数」「イントネーション句」「繰り返される要素の隣接性」「生産性」における違いに反映される。重複のイントネーション句，隣接性については 2 節では取り上げなかったが，重複がイントネーション句をまたがることは考えにくく，繰り返される要素が隣接するのが基本である（Gil 2005）[8]。2 節の観察をまとめると表 4 のようになる。

表 4　繰り返しの 4 つのタイプ

			連濁	アクセント句	要素の数	イントネーション句	要素の隣接性	「生産性」
繰り返し	重複	語レベルの重複	生じる	1	2	1	する	低い
		句レベルの重複	生じない	1 以上	2 か 2 の倍数	1	する	高い
	反復	文レベルの反復	生じない	2 以上	2 以上	1	する	高い
		談話レベルの反復	生じない	2 以上	2 以上	1 以上	しない	無制限

この 4 つの中で最も記述が立ち遅れているのが，文レベルの反復である。文レベルの反復と談話レベルの反復は区別せずに議論されることが多いため，文レベルの反復にのみ観察される形態的・統語的な特徴の記述は進んでおらず，2.3 節で見たような制約がなぜ生じるのかについてはほとんど明らかになっていない[9]。また，意味的・語用的な特徴についても，「強調を表す」（益岡・田窪 1992），「会話において反応表現として用いられる」（鈴木 2016，Ono &Suzuki 2017）といったことが指摘されているが，(24)と(25)に見られるような同じ形容詞の反復でも状況によって自然さが変わってくるよう事実などは，「強調」「反応」といった観点からは十分に説明できないと思われる。

(24)　［高所恐怖症の人が高所から下を眺めながら］うわあ，たかいたかい！

(25)？［パンフレットを見ながら］姫路城の天守は 30m もあるんだ。たかいたかい。

（大江 2017:20）

文レベルの反復の意味的・語用的特徴や，その文法的なふるまいの記述を精緻化していくことで，重複と反復の連続性がより明確に捉えられるようになることが期待される。

なお，本稿で示した 4 つの下位区分は，表 4 のような形で常に各項目が連動するのではなく，実際にはより複雑な様相を呈するものと予想される。また，談話レベルの反復については，「文レベルの反復以外の反復」といった消極的な位置づけしかできておらず，どこまでを談話レベルの反復と扱ってよいのか（特に(17)(18)のようなものを重複や文レベルの

反復と並べて位置づけてよいのか）といった課題も残っている。今後，さらに検討していきたい。

＜注＞

[1] オノマトペは連濁を生じない（「サラザラ」とはならない），副詞的位置であれば 3 回以上の繰り返しも自然である（「雷がピカピカピカと光った。」cf.「??床がピカピカピカだ。」）など，他の典型的な重複語とは異なるふるまいを見せることから，一般語彙による重複語とオノマトペを区別して考えるべき面もあるが，本稿ではこのような差異には立ち入らず，ともに典型的な重複として扱っておく。

[2] 野呂（2016）は，「1 つの文の中で同じ語句が繰り返される表現」を「反復構文」と呼び，これらを構文文法の枠組みで統括的に分析している研究である。その中には小野（2015）が指摘する「子供子供している」タイプの構文のほか，繰り返される要素が隣接しない（ア）のような多様な構文が含まれる。

（ア）a. 人間らしい人間
b. 男の中の男
c. 寒ければ寒いほど
d. 不満といえば不満だ
e. 見たことは見た

（ア）のような構文も重複の一種として扱うべきか，反復の一種として扱うべきか，あるいはいずれにも該当しないのかという問題については稿を改めて論じたい。

[3] なお，(14)は青木（2009）の分析との関係でも興味深い例になる。青木（2009）は，動詞連用形の重複が「する」を伴って動詞述語化するのは，現代語では複合動詞の重複（「立ち止まり立ち止まりする」）や動詞句の重複（「破っては書き破っては書きする」）に限られ，単純動詞の重複は「する」を伴わないと分析している（「書き書きする」「踏み踏みする」は不自然になるとされている）。しかし，(14)は「拭く」という単純動詞の連用形重複が「する」を伴って動詞述語化している。

[4] アクセント構造の変化が生じるパタンと生じないパタンとの違い，4 回以上の繰り返しが可能な範囲についてはさらに詳細な検討が必要である。例えば，「お金お金お金お金した内容」「休み休み休み休み，山を登った」はあまり自然に感じられず，4 回以上の繰り返しには繰り返される語のモーラ数も関わっていると予想される。

[5] 「人々」「子供子供している」といった重複を理解する上で，文形成というプロセスは必ずしも必要ではない。仮にある話者が「多くの人々が困っている。」のような文を産出した場合，「人々」の部分は結果的に一息に立て続けに「人」という名詞を繰り返していることになる

が，繰り返しが生じている理由は，複数の人間を表すという語の形成（語の選択）レベルに求められるのであり，文の形成とは直接的には関わらない。

[6] 問題になると思われるのが，（イ）のような例である。

（イ）　列車が長い長いトンネルを走っている。

（イ）の「長い長い」は「トンネル」を修飾し，「長い長いトンネル」で名詞句として完結しているように見えるので，一見すると「文レベル」で繰り返されているとは言いにくい（すなわち句のレベルで繰り返しが生じている）ようにも見えるが，本稿では（イ）も句のレベルではなく，文レベルで繰り返しが生じていると考える。なぜなら，「長い長いトンネル」のような表現が，単純な事物の表し分けをする場合には成立しにくいためである。例えば，長さの違いがあるトンネルの写真が 3 枚あったとき，「短いトンネル」「長いトンネル」「すごく長いトンネル」といったラベルを貼って互いを区別するということは自然であるが，「すごく長いトンネル」に替わって「長い長いトンネル」という表現を用いるのはあまり自然でないだろう。つまり，「長い長いトンネル」のような表現は，純粋な句のレベルでは自然にならず，（イ）のような文に収まることではじめて自然になると考えられるのである。この点については，さらに詳しい検討が必要であるが，現時点では本稿では（イ）のような反復も「文レベルの反復」であると考えておく。

[7] これらの研究が扱うものの中には本稿が文レベルの反復と呼ぶものも含まれる。

（ウ）04A：［自主留年みたいな感じのやつとかもいるからわかんないけど。

05B：［はいはいはいはいはいはいはいはいはい。

（竹田 2017:73 の例文を簡略化）

（ウ）の「はいはいはいはいはいはいはいはいはい」という繰り返しは，一息に立て続けに行われており，これ全体で一文を成していると考えることができるので，(15)と同じタイプと見ることができる。

[8] 注 2 で触れた（ア）のような構文を重複に含めるとすれば，重複にも繰り返される要素が隣接しないものを認めることになる。

[9] 文レベルの反復の形態的・統語的特徴を記述している数少ない研究に，Hatakeyama et al. (2015)がある。

＜参照文献＞

相原林司（1985）「反復表現の諸相」林四郎（編）『応用言語学講座第 1 巻日本語の教育』pp.163-181. 明治書院.

青木博史（2009）「動詞重複構文の歴史」『日本語の研究』5(2), pp.1-15.

大江元貴（2017）「「反復発話」の文法－「怖い怖い。」は「怖い。」と何が違うか－」『日本語学会 2017 年度秋季大会予稿集』pp.17-24.

小野尚之（2015）「構文的重複語形成－「女の子女の子した女」をめぐってー」由本陽子・小野尚之（編）『語彙意味論の新たな可能性を探って』pp.463-489. 開拓社.

小池清治（2002）「反復表現」小池清治・小林賢次・細川英雄・山口佳也（編）『日本語表現・文型事典』pp.319-322. 朝倉書店.

定延利之（2015）「遂行的特質に基づく日本語オノマトペの利活用」『人工知能学会論文誌』30(1), pp.353-363.

鈴木亮子（2016）「会話における動詞由来の反応表現－「ある」と「いる」を中心にー」藤井洋子・高梨博子（編）『コミュニケーションのダイナミズムー自然発話データからー』pp.63-83. ひつじ書房.

竹田らら（2017）「どの場面で，誰が，何を，何のために「繰り返す」のかー二種類のジャンルにおける「反復」の機能とそれがもたらす協調性ー」『日本語学』36(4), pp.70-80. 明治書院.

中田智子（1992）「会話の方策としてのくり返し」『研究報告集』13, pp.267-302. 国立国語研究所.

長屋尚典（2015）「重複」斎藤純男・田口喜久・西村義樹（編）『明解言語学辞典』p.155, 三省堂.

野呂健一（2016）『現代日本語の反復構文－構文文法と類像性の観点からー』くろしお出版.

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法　改訂版』くろしお出版.

Gil, David. (2005) From Repetition to Reduplication in Riau Indonesian. Bernhard Hurch (ed.) *Studies on Reduplication*. Mouton de Gruyter.

Hatakeyama, Yuji, Kensuke Honda and Kosuke Tanaka (2015) The Verb Doubling Construction in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics*, 31: pp.57-68.

Ono, Tsuyoshi and Ryoko Suzuki (2017) The Use of Frequent Verbs as Reactive Tokens in Japanese Everyday Talk: Formulaicity Florescence, and Grammaticalization. *Journal of Pragmatics*, 123: pp.209-219.